硯箱と時計

沖野岩三郎

青空文庫

石之助が机にむかつて、算術をかんがへてゐますと、となりの金さんが来て、

「佐太さん。石さんはよく勉強するね。きつと硯箱になりますよ。」と、言ひました。すると佐太夫は、

「いいえ。石之助はとても硯箱にはなれませんよ。硯箱になるのは、あんたの所の茂丸さんですよ。」と、申しました。

ふすまのこちらで、お父さまと金さんの話をきいてゐた石之助は、へんなことをいふものだなあと思ひました。

しばらくして、金さんが帰つたので、石之助はすぐ、お父さまの所へ行つて、

「僕が、硯箱になれないつて、何の事ですか。」と、きいてみました。

石之助が、あまり不思議さうな顔をしてゐるので、お父さまは、ひざをたたいて笑ひながら、

「狸が茶釜になつた話はあるが、人間が硯箱になつた話は、きいたことがない。こりやあ、私たちの言葉のつかひ方が悪かつた。硯箱になるのは、茂丸さんか、お前か、どつちだらうと言つたのは、かういふわけだ。」と、云つて、お父さまは、硯箱になるといふ話を説明しました。

「石之助、お前は殿様のお名前を、知つてゐるだらう。」

「知つてゐます。山野紀伊の守です。」

「さうだ。元は三万八千石の殿様で、今は子爵様だ。東京にゐらつしやる。」

「馬に乗るのが上手でせう。」

「その殿様は、もう、お亡くなりになつて、今は若殿様が子爵さまになつてゐられる。山野紀伊の守様が、東京へお引越になられてから、もう五十七年になる。その間に一度もこの町へお帰りにならないので、この町の人たちは、だんだんと、殿様の事を忘れてしまひさうだ。昨年若殿様が御病気なされた時、ひとりも、お見舞ひの手紙をさし上げたものがなかつた。それは町の人もわるいが、五十七年間、一度もこの町へおいでにならなかつた殿様も悪い。そこで、殿様とこの町の人たちが、もつと仲よくなるために、今年からこの町の学校を卒業する優等生に、殿様から御褒美を下さることになつたのだ。中学校の優等生には鉄側時計、女学校の優等生には銀側時計、小学校の優等生には硯箱を下さるんだ。御定紋のついた硯箱だよ。」

お父さまが、それだけ言つた時、石之助は、

「わかつた、わかつた。僕その硯箱をほしいなあ。」と、云ひました。

「うん、ほしからう。私もお前が、その硯箱をもらつてくれればよいがと思つてゐる。ところで今、六年生の一番は茂丸さんだといふぢやないか。茂丸さんは、あれは士族ぢやないんだ。出来ることなら、昔の家来であつた士族がもらひたいもんだ。ここは代代足軽といふ役をしてゐた士族だから、お前がその硯箱をもらつてくれたなら、殿様も、さぞお喜び下さるだらう。」

お父さまの佐太夫は、さういつて涙ぐんでゐました。

「お父さま大丈夫だ。僕、きつとその硯箱をもらつてみせる。」

石之助は元気に、にぎりこぶしで、ひざをたたきながら言ひました。

「さうか。そのかくごはよい。お前は茂丸さんに勝つ見こみがあるか。」

お父さまは、心配さうに問ひました。

「あります。僕きつと、一番になつてみせます。」

石之助は、自信のあるやうに言ひました。

そのあくる日から、石之助は、どうしても殿様から、硯箱をもらはなければならないと思つて、必死に勉強しはじめました。

一月二月がすぎ、三月が来ました。卒業試験が近づいてきたのです。けれども正直に言ふなら、算術は茂丸の方がよく出来ます。習字も茂丸の方が上手です。どうも茂丸の方が一番になりさうです。だから何とかして、茂丸を二番にする方法はないものかと、考へてばかりゐました。

茂丸は石之助よりも、からだが弱いので、あまり勉強はいたしません。お父さまの金太夫さんが、いろいろと硯箱のことを言ひますが、茂丸は唯にこにこ笑つてゐて、そんなものをほしいとも何とも言ひません。金太夫さんは、茂丸には勇気がなくていけない、やつぱり平民の子はだめだと、言つてゐました。

いよいよ卒業試験が始まりました。ところが、二日目の算術と綴方の試験の日、茂丸はひどく熱を出したので、学校を休みました。

石之助は試験がすむと、おうちへとんで帰りました。そして、

「お父さま、大丈夫硯箱はもらはれますよ。」と、申しました。

「大丈夫か。」と、佐太夫は申しました。

「大丈夫です。今日は茂丸さんが、熱を出して休んだから、きつと僕が一番になるよ。」

石之助は手をたたいて、ざしき中をはねまはりました。お父さんの佐太夫も喜びました。

お隣の金太夫さんは、たうとう硯箱は石之助さんのものだと言つて、ほろほろ涙をこぼしてゐました。けれども茂丸は、

「なあに、落第しつこはないよ。」と、言つて、おふとんの上で童話の雑誌を読んでゐました。

卒業式の日が来ました。いろいろの式があつたあとで、山野紀伊の守の家老を務めてゐたといふ髯の白い老人が、殿様の代理で、

「本年から優等生に、旧藩公山野子爵閣下より、御定紋付の硯箱を下さることになりました。」と、申しました。そしで、校長さまから、

「粉白石之助……」と、呼ばれた時の石之助の喜びは、口にも筆にも現はせないほど大きなものでした。

式が終つて、おうちへ帰りますと、佐太夫は、早速其の硯箱を仏壇の前にそなへて、

「お父さま。お母さま。おぢいさま。おばあさま。喜んで下さい。今度せがれの石之助は、殿様から御定紋付の硯箱を頂きました。どうぞ石之助をほめてやつて下さい。」と、申しました。おつ母さんも、仏壇の前でほろほろと、うれしなみだを流してゐました。

三月の終に、石之助も茂丸も中学校の入学試験を受けました。石之助が一番、茂丸が三番で入学しました。それを見た金太夫さんは、中学校の鉄側時計も、石之助さんのものだと、思ひました。

中学の一年から二年になる時、石之助が一番で、茂丸が五番でした。三年になつた時、石之助が一番で、茂丸が七番でした。四年に

なつた時、石之助が一番で、茂丸が九番でした。

いよいよ卒業の時が来ました。卒業式には県知事さんが来ました。髯の白い家老さんも来ました。そして殿様の定紋を刻みつけた鉄側時計は、石之助に下さいました。

町の小い新聞には、大きな活字で、石之助のことを、ほめてほめて書いてありました。

茂丸は十番で卒業しました。身体が弱くて時時休んだからでした。けれども、東京へ出て、高等学校の入学試験を受けますと、石之助も茂丸も入学は出来ましたが、どうしたものか、今度は石之助が五番で、茂丸が一番でした。

石之助は何だか、殿様に申しわけがないやうに思ひましたが、国を出る時お父さまの佐太夫から、

「試験がすんだなら、すぐ殿様の所へ、お礼に行くんだぞ。」と、言はれてゐたので、田端の丘の上にある、山野子爵家に、たづねて行きました。

表げんくわんから取次を頼みますと、ひとりの老人が出て来て、住所姓名を尋ねた上、

「旧藩時代の御身分は。」と、むつかしいことを問ひました。そこで、石之助は、

「おぢいさまの時まで、足軽といふ役を勤めてゐたさうでございます。」と、答へますと、

「さうですか。では表げんくわんから、入つてはいけません。あちらの小玄関からお入り下さい。」と、申しました。

石之助は、へんだなあと思ひながら、小玄関へ行つてみますと、短い袴をはいた書生さんが出て来て、

「こちらの応接室へお入り下さい。」と、言ひました。

石之助は、ほこりまみれになつた靴をぬいで、げんくわんへ上りました。書生さんが、どあをあけてくれました。見れば応接室の奥に、色の白い青年が椅子にかけてゐました。その青年が、殿様の山野子爵だつたのです。

石之助は顔をまつかにして、応接室へ入つて行きました。そして、硯箱と時計とのお礼を申しますと、殿様は、

「不思議だね、僕はそんなものを、君にあげた覚えはありませんよ。第一僕と君とは、今はじめて会つたのではないか。」と、申しました。

石之助は、小学校卒業の時に、硯箱をいただいたこと。中学校卒業の時に、時計をいただいたことを、申し上げますと、殿様は腹をかかへて、笑ひました。

「僕は知らないよ。僕はそんなものを、君達にあげた覚えはないよ。多分山野家が、だんだんと、昔の家来たちに、忘れられて行くのを苦しく思つて、家令どもが、そんな事をはじめたのだらう。へえん、さうかなあ。僕の名前で硯箱だの時計だのを、君に上げたのかい。実はね、僕は身体がよわくて、学習院の中学部で、二度も落第したんだぜ。だから、たうとう高等部に入学できないで、かうして毎日、ぶらぶら遊んでばかりゐるんだよ。世間には、僕のやうな落第生から、賞品をもらつて喜んでゐるやつがあるのかい。」

殿様はそんな事を言つて、また大きな声で笑ひました。

石之助はびつくりして、ぼんやりしてゐました。すると殿様は、

「粉白石之助君。君は今まで僕を君よりえらい人間だと思つてゐたんだらうね。昔は殿様がえらくて、足軽は、ひくい役人だつたが、

今は中学の落第生よりも、高等学校の学生さんの方がえらいんだよ。だから、君の方が僕より二倍も三倍もえらいんだよ。」と、申しました。

石之助は、ますます、びつくりするばかりでした。殿様はまた申しました。

「君、硯箱だの時計だのを、もらひたさに、勉強するやうではだめだぜ。学問を勉強しなくてはならないよ。本当の学問を……」

そのとき石之助は、この落第生の殿様を、何だかえらい人のやうに思ひました。

それから石之助は、勉強の目的をかへました。今までのやうに、褒美をもらつたり、一番になつたりするための勉強ではなく、自分の志したお医者になるための学問を、必死に勉強しました。

大学を出る時、茂丸は理科の一番でした。石之助も医科の一番でした。

落第生の殿様は、その頃(ころ)すつかり、からだが達者になつて、北海道で牧畜をして大成功してゐました。

「殿様の牛乳配達」といふ記事が、日本中の新聞にのつたのは、二人が大学を卒業した年の夏でした。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系　第一一巻」ほるぷ出版
　　1978（昭和53）年11月30日初刷発行
底本の親本：「特選童話　三年生」金の星社
　　1938（昭和13）年7月
初出：「金の星」金の星社
　　1926（大正15）年1月
入力：tatsuki
校正：田中敬三
2007年2月21日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

硯箱と時計

沖野岩三郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/